原著

母性看護学実習における学びに関する研究
－分娩見学を終えた学生たちによるグループインタビューの分析－

伊東　美智子[1)]　島内　敦子[1)]

Study about learning in a motherhood nursing training
－ Analysis-of a group interview by the students who have finished child delivery observation －

Michiko ITOH[1)] and Atsuko SHIMANOUCHI[1)]

【要旨】

〈目的〉母性看護学実習において分娩見学ができた学生自身からその時の心境等について聴き、今後の教育支援に活かす。〈方法〉分娩を見学した学生の内、研究協力の同意を得られた看護学科3回生7名に対してグループインタビューを行い、語られた内容を分析した。〈結果〉【】をカテゴリーとする。産婦に対面した直後の学生は【嬉しさ】の反面【不安】や【戸惑い】を感じていた。次第に【分娩の現実】を肌で感じ、どうしたら良いのかと【自問と葛藤】を繰り返すようになるが、指導者らから【実践的な支援】を得ることで産婦に寄り添え、最後は出産と共に【感動】や児への【愛おしさ】に満たされていた。また、【具体的な事前学習】の必要性も実感していた。〈結論〉学生たちは分娩見学を通して自問や葛藤を内包した自己内対話を繰り返していた。これは成長過程として重要であり、教育者は見守る一方、言語的説得を交えた実践的な関わりが必要であると考えた。

キーワード：母性看護学実習、分娩見学、グループインタビュー、自己内対話

【Abstract】

Methods: The purpose of this study is to analyze students' narratives after observation of child delivery in maternal nursing practice as a part of for learning. A group interview was performed with 7 nursing departments 3 comebacks which could get consent of research collaboration in the observation and the student who practiced. The told contents of the interview were analyzed, and the child delivery

1）保健科学部看護学科

period nursing was classified. The results show that students felt things such as “Pleasure,” “Expectation,” “Am I good?,” “Uneasiness and Anxiety,” and “Seriousness of child delivery.” “Asking which has no responses” was piled, and we also assumed “Am I good?” discord to aid to the woman whose term is near one is doing. Discord looks at oneself, and, a student, in the chance when one grows, with practicing concerning by the teachers who included linguistic persuasion is also needed. I partook of an “impression” with a mother and child at the end of the observation and also noticed the “necessity of preliminary learning.”

Key words：maternal nursing practice, child delivery observation, group interview, self-dialogue

はじめに

看護基礎教育における母性看護学実習では、妊娠・分娩・産褥各期にある女性と新生児及びその家族を対象として、その家族の役割移行を理解し、健康の保持・増進と家族機能の順調な発達に関する援助について学習する。中でも、分娩見学は、学生が生命の誕生に触れ、喜びや神秘性を体感し、家族や産婦への看護を考える上で大きな影響を及ぼしている。一方で、少子化等の影響から、母性看護学実習施設や対象者の確保が困難な状況が続いており、先に示した学習目標や卒業時の到達目標にたどり着くことは容易ではなく、取り分けても分娩時の見学実習を体験できる学生は、非常に限られる現実がある。

このような現状の中だからこそ、数少ない分娩を見学できる学生には、その体験からより多くの学びを深めて欲しいと期待する。しかし、実際の実習場面での学生は、産痛に苦しむ産婦にどのように接したらよいのか、声を掛ければよいのか、戸惑いを隠せない様子がしばしば見受けられる。先行研究でも、分娩見学時のストレスとして「分娩見学ではどのように声をかけ、何を行ってよいのかわからず、緊張と焦りはあった」と報告されている[1)]。これ等より、いつ分娩見学できるチャンスに恵まれるかの予測がつかない状況にある学生にとって、実習前学習のあり方や内容、工夫が重要であると考える。

そこでこの度、母性看護学実習に臨んだ本校看護学科３回生の内、実際に分娩１期～４期の見学が可能であった学生を中心に、当時を振り返った語りを聴き取ることとした。先行研究の題材の大半が実習後のレポートからの読みとりとなり、評価対象となる内容でもあるため学生の本心が見えにくいと考えられ、グループインタビューにより深く学生の想いを理解し得ると考えた。

これらより本研究では、学生たちは分娩の見学を行う中で何を感じており、どのような支援を求めていたのかを明らかにすることを目的とする。そこから、実習の前段階としての講義や学内演習で取り入れ可能なプログラムや、実習時の教員や指導者に求める学生への教育的支援について示唆を得る。

用語の定義

１．分娩見学

分娩の過程を、病棟助産師または教員の指導のもとに、産婦や胎児、新生児、場合によっては付き添っている夫や家族への観察や援助を行いながら、見学することとする。

研究方法

研究協力者

平成 27 年度　母子支援実習Ⅲ（母性看護学実習）終了後、実習評価が公表された後、「分娩見学を通して感じたことを語ろうの会（以下、語ろう会）」について、学内ポータルシステムを利用し、会の主旨を説明し、自由参加であることを明記して参加者を募集した。

データ収集方法

「語ろう会」に参加表明し、文書により会の主旨説明を改めて詳細に行った上で、研究協力に同意した学生を対象とした。本人たちと日時調整をした上で集合場所に協力者を集め、先ずは実習記録の返却と同時に、各自の必要枚数分だけのカードを配布した。それにはインタビューガイドと照らし合わせた、各人の実習記録を紐解く事で当時を振り返り、具体的に思い浮かんだ経験や思いを文字にして記載してもらうように依頼した。協力の意志が変わらなければ約１時間後に再集合してもらうように告げたところ、協力者の顔触れに変化は無く、そこで改めて本人たちに会の主旨説明を行った。「語ろう会」では、先に発言した学生の意見に影響を受け過ぎないようにするため、予め記載してきてもらっているカードを見ながら、インタビューガイド（表 1）に沿って、カードの内容を各自が説明することから語り始めるグループインタビュー法をとった。

グループインタビューを取り入れた理由として、１）社会的相互作用を通してデータを生み出すこと。絶えず変化する相互作用によって、参加者は考えを刺激され、研究課題についての自分自身の感情に気づく。２）お互いの意見に応えることで、情報提供者は、研究者がインタビュー前にも、インタビューの最中にも考えなかった新しい、そしてのびのびとした発想を生み出す。３）面接者を含めてすべての参加者は、質問する機会をもつ。これが個人面接よりも多くの発想を生み出す。等のメリットがある[2)]ことより、学生の想いを深く理解できると考えた。本研究法のデメリットとして、1 人か 2 人の人が討論を支配し、結果に影響を与えることが考えられたので、予め個人の考えをカードに記載してもらい、会の時々で発言していない内容は無いかを確認しながら進行した。開催時間は約 90 分で終了し、事前に了承を得た上で語りの内容を IC レコーダーで録音した。インタビュアーは母性看護学担当教員が行い、司会と記録係を分担した。

データ分析方法

データは質的帰納的に分析した。まず、語られた内容から逐語録を作成した。次に逐語録を繰り返し読み、研究協力者の背景や前後の文脈に留意して、意味内容が理解できる単位で要約し、分娩見学を行う中での経験や思い、必要とした支援等を抽出した。次に、抽出した語りの類似性・相違性を検討しながら、記述の意味内容を損なわないように抽象度を上げ、サブカテゴリー化した。次に、サブカテゴリー間での類似点と相違点を類別し、抽象度を上げカテゴリー化した。次に抽出したカテゴリーの関係性について検討した。それぞれのカテゴリーは、その内容や性質を示す言葉で命名した。なお分析は、質的研究の経験を持つ研究者で行い、分析結果の真実性を確保した。

表１　インタビューガイド

1. 分娩見学に入った当初（あるいは実習の振り分けで、「分娩があります」教員から言われた時）のあなたの心境。
2. 受け持ち産婦のもとに挨拶に出向いた時の学生の心境。
3. 分娩が進行してゆく途中のあなたの心境。
4. 分娩が終了した時点のあなたの心境。
5. 分娩期のケアの実践あるいは見学の際、あなたに向けて行われた指導助産師や教員からのサポート。
6. 事前に学びたかったり、指導して（おいて）欲しかったりしたこと。

倫理的配慮

神戸常盤大学研究倫理委員会に諮り、了承が得られてから研究に取り組んだ（神常大研倫第 15-15 号）。インタビューの時期は、既に実習評価が出た後に行い、今後も語られた内容が学習上の成績に影響しないことを保証した。インタビュー協力者には、調査の趣旨と協力は自由意思であり中断の自由も確保されていること、回答したくないインタビューには返答しなくても良いこと、調査への協力をしなくても不利益を被らないこと、インタビュー内容は本研究の目的以外には使用しないこと、同意書を含む紙媒体や収集したデータは鍵付きの棚にて厳重に保管すること、研究終了後に本調査で得たデータは破棄し個人が特定されないようにすること等を、文書と口頭で説明して同意を得た。

結果

1．研究協力者の概要と産婦の状況及び実践したケア

協力者は看護学科３回生の７名である。いずれも 20 歳前半の未婚女性であった。協力者が分娩見学した産婦の状況等は、表にして示す（表 2)。

2．分娩見学ができた学生たちの心境、得られたサポート及び学んでおきたかったこと

分析結果はインタビューガイドに沿って先ずはコード分類を行い、その中からサブカテゴリー、カテゴリーを抽出した（表 3)。

本文ではカテゴリーを【】、サブカテゴリーを〈〉、コードは「」で表す。以下に、分娩見学が可能であった学生たちは、実習で何を感じており、どのような支援を教員等に求めていたのかについて、聴き取った内容をもとに説明する。

1）分娩見学に入った当初（あるいは実習の振り分けで、「分娩があります」と教員から言われた時）のあなたの心境。

臨床側から分娩見学許可が出た旨の連絡を得た教員は、そのことを学生たちに知らせた後、実習状況を見極めて誰が見学に入るかを決めるのであるが、その時の学生の心境は分娩が見学できる【嬉しさ】を抱く反面、〈どうしたらよいのか〉〈想像がつかない〉ことによる「不安な気持ちのほうが大きかった」。そして、〈私でよいのか〉〈自分に何ができるのか〉といった【自問】を繰り返しながら、「自分が付か

表２　研究協力者の概要と産婦の状況及び実践したケア

学生名	分娩見学した産婦	分娩期	夫立ち合いの有無	実際に行ったケア
A	初産婦	第Ⅱ期～第Ⅳ期	有	手を握る(教員に教えられて) うちわでおあぐ 汗拭き 水を渡す
B	経産婦	第Ⅰ期～第Ⅳ期	無	水を飲ませた(教員に教えられて) タオルで顔を拭く
C	初産婦	第Ⅰ期～第Ⅳ期	有	立ち会い分娩だったので夫が上手にサポートしていた
D	初産婦	第Ⅰ期	無	誘発 テニスボールでポイントを押さえた 水分
E	初産婦	第Ⅰ期、第Ⅱ期およびⅣ期	無	一日目：第Ⅰ期→足浴 二日目：第Ⅱ期～第Ⅳ期 産後の更衣
F	初産婦	第Ⅰ期、第Ⅱ期およびⅣ期	無	一日目：第Ⅰ期→足浴 二日目：第Ⅱ期～第Ⅳ期 産後の更衣
G	初産婦	第Ⅰ期～第Ⅲ期	無	水分補給 背中を摩る(教員に教えられて)

表３　分娩見学ができた学生たちの心境、得られたサポート及び学んでおきたかったこと

質問事項	カテゴリー	サブカテゴリー	コード
１．分娩見学に入った当初（あるいは実習の振り分けで、「分娩があります」教員から言われた時）のあなたの心境。	嬉しさ	期待	自分がそこにいさせてもらうから何かできたらいいな 見たいという気持ちはあった
		分娩見学に入る嬉しさ	すごく楽しみで嬉しくて 嬉しさとドキドキと
	不安	どうしたらよいのか	初対面の人にどう話し掛けていいのかわからない どんな顔、テンションでゆけば良いのか
		想像がつかない	想像がついてなかった
		不安の方が大きい	不安な気持ちが大きかった 不安のほうが大きくて
	自問	私でよいのか	私が付き添っていいんだろうか 自分が付かせていただいて大丈夫なのかといった緊張感
		自分に何ができるか	自分に出来ることって何があるんだろう 私なんかで大丈夫なんか
	前向きに	産婦と対面後の印象（楽観）	苦しい感じを想像して行ったら話してくれて想像と違った
		頑張ろう	せっかく見せていただくんだから頑張ろう
２．受け持ち産婦のもとに挨拶に出向いた時の学生の心境。	戸惑い	申し訳ない、これで良いのか	陣痛間隔が短くなっている時に挨拶に行ったので申し訳なかった どうしたらいいのか分からなくなった
		不安や戸惑いがあった	ここに入っていいのかという不安や戸惑いがあった 自分が不安に感じていることを出したら産婦の方が不安になる
		産婦と対面後の印象（疲れ、怒り）	怒っているように感じ、本当に実習を受け入れてもらっているのか
	タイミング	挨拶はこのタイミングでいいのか	挨拶はこのタイミングで良いのか 挨拶に行った時は痛くなり始めた時だったので、申し訳なかった
		同意書を説明するタイミング	同意書を取るのは今行っていいのか
		余裕のある状態での出会い	分娩の合間に携帯をいじって夫に連絡をとる余裕があった まだ産婦に余裕がある時だったので緊張がほぐれた
	気合い	担当する者としての気合い	そのまま受け持ちになるかも知れないので産後に繋げたい
３．分娩が進行してゆく途中のあなたの心境。	分娩の現実	分娩の現実と衝撃	想像以上に陣痛を痛がっており、こんなに痛いのだと思った 産婦の痛がりを見て、あまりのことに口が開いたままに
		分娩の大変さ	分娩中はこんなに変わるほどに大変なんだ 分娩後の笑顔を見て、それだけ分娩が大変だと
	自問と葛藤	どうしたら良いのか	何をしたらいいのかわからない 声を掛けるタイミングや、どう言ったらいいのかも分からない
		言えない葛藤	心の中で「頑張ってください」と思っているが言えない葛藤 上手な呼吸法か分からないので「上手です」と言えない
		自己の振り返り	ここに立っていること自体が負担になっているのではないか この人の力に私はなれているのか
	感謝	自分の母への感謝	自分もこうやって生まれてきたんだ
		立ちあえていることへの感謝	苦しいのに見学を了承してくださったのだからちゃんと
４．分娩が終了した時点のあなたの心境。	感動	喜び、安堵、感動	分娩第１期から見ていて頑張って生まれて喜びを感じた 最初に生まれた瞬間は、よかったよりも感動した
		産婦の頑張りへの感謝感動	10ヶ月の間、生命を大切にして生まれてきた生命の有難み 赤ちゃんのためだったらこんなにも頑張れるんだ
	現実からの理解	実際を知ることでの理解	子どもを産むために母親がすごい頑張ったことを実感した 余裕が無くなり、口調がきつくなることを理解しておく必要
		分娩前後の母の変貌	赤ちゃんと対面した時のお母さんの顔がすごい変わった 分娩が終わった途端、口調も柔らかくなり、こんな人だったんだと
		会陰縫合の現実	会陰縫合中、ずっと痛がって学生の手を力強く握っていた 痛がるお母さんに申し訳なかった
		予想外の分娩進行	分娩が思っていたより早く、こんなに早く終わるんだと感じた 自分ではもっと長いイメージを持っていた
		産婦からのごめんね	分娩後直ぐに「強く当たってごめんね」と言ってもらった
	充実感	お母さんの力になれた	いきみやすい格好にケアしたことを感謝された 分娩後に「居てもらって助かった」「汗拭いてくれて有難う」と
	愛おしさ	愛おしい赤ちゃん	私は何もしていないのにすごく愛おしい 立ちあっただけなのにかわいくてかわいくて
５．分娩期のケアの実践あるいは見学の際、あなたに向けて行われた指導助産師や教員からのサポート。	実践的な支援	実践したケア	汗を拭き、いきまなくていい時には力を抜くように手を取った 呼吸法とか声掛けを助産師と一緒に口に出して言ったりした
		指導されたこと	CTGの読み方や分娩室内での学生の立ち位置 汗の拭き方、手を握る、腰のさすり方や圧迫の掛け方、水分摂取を勧める
		よかったこと	産婦が酸素マスクを装着したことの理由の説明 胎児心拍のリズムや音の変化を教えてもらいその後は確認しながらケアが出来た
	それでも残る戸惑い	声掛けにおける戸惑い	頑張っている人に「頑張ってください」はよくないと学んでいた 何を声掛ければいいのか、本当に上手いのか判断できない
		悩んだこと	言葉に責任を持たないといけないが判断基準が分からない 分娩室では学生はどこに立てばよいのか悩んだ
		困ったこと	産婦さんと学生だけの時に「赤ちゃんは大丈夫か」と聞かれたが何も言えなかった 私は体験していないのに、どう声かけをしたらいいのか

表３　分娩見学ができた学生たちの心境、得られたサポート及び学んでおきたかったこと

質問事項	カテゴリー	サブカテゴリー	コード
６．事前に学びたかったり、指導して（おいて）欲しかったりしたこと。	具体的な事前学習	学生ができるケアのイメージ作り	学生がすることをわかっとけばよかった 分娩中のケアをロールプレイで授業中にやったらよかった
		事前学習しておくべきこと	分娩中に当たりが強くても陣痛によるものであるということ 吸い飲みの使い方も体験したことが無かった
	実践できたケアの振り返り	学生でも実践できたケア	背中をさする、うちわであおぐなど、学生でもできる援助を自分で理解しておくべき もっと分かっておけばよかった
	声掛けの難しさ	声掛けの難しさ	もっと声掛けとか勉強しておけばよかった どういう声掛けがよいのか具体的に挙げていたらよかった
	看護計画立案の必要性	看護計画立案の重要性を再認識	その場でアセスメントが出来るような 咄嗟のときの判断ができるような事例を使っての準備

せていただいて大丈夫なのかといった緊張感」を感じていたことが分かった。しかし、「苦しい感じを想像して行ったら話してくれて想像と違った」〈産婦と対面後の印象（楽観)〉を持てた学生は、「せっかく見せていただくんだから頑張ろう」と、【前向きに】に臨んでいた。

２）受け持ち産婦のもとに挨拶に出向いた時の学生の心境。

学生は、産痛に苦しむ産婦を前に〈同意書を説明するタイミング〉や自己紹介を兼ねた〈挨拶はこのタイミングでいいのか〉など、いずれもどの【タイミング】で切り出したらよいのか【戸惑い】を感じており、「どうしたらいいのか分からなくなった」。その一方、「このまま受け持ちになるかも知れないので産後に繋げたい」と〈担当する者としての気合い〉に溢れ、積極的に援助しようとする学生もいた。

３）分娩が進行してゆく途中のあなたの心境。

分娩が進行する中、強まる産痛に喘ぐ産婦を通して〈分娩の現実と衝撃〉を感じ、〈分娩の大変さ〉を実感していた。さらに、自らが行っている産痛緩和のマッサージや圧迫法等を遥かに超えて痛みを訴える産婦の姿を目の当たりにし、〈どうしたらいいのか〉、「心の中で『頑張ってください』と思っているが〈言えない葛藤〉」を感じる中での【自問と葛藤】を繰り返していたことも明らかになった。また、自分の行った援助に対して「この人の力に私はなれているのか」と〈自己の振り返り〉もしていた。一方、場の空気に圧倒されながらも、生命誕生の瞬間に〈立ちあえていることへの【感謝】〉や、「自分の母もこうやって産んでくれたんだと涙がこみ上げた」といった、〈自分の母への【感謝】〉に思いを馳せる声も聞かれた。

４）分娩が終了した時点のあなたの心境。

分娩終了時は、それまでの緊張が高かっただけに〈喜び、安堵、感動〉〈産婦の頑張りへの感謝感動〉という深い【感動】に包まれると同時に、「いきみやすい格好にケアしたことを感謝された」りして、〈お母さんの力になれた〉という【充実感】にも満たされていた。また、生まれてきた新生児をことさらに【愛おしく】感じていた。その一方、出産と同時に一気に安らぐ〈分娩前後の母の変貌〉に、改めて「分娩後の笑顔を見て、それだけ分娩が大変だと」思いを馳せる学生もいた。また、分娩直前のクリステレルの併用や、講義ではほとんど触れられることのない〈会陰縫合の現実〉を含めた〈予想外の分娩進行〉も目の当たりにすることで、【現実からの理解】に繋がっていた。

５）分娩期のケアの実践あるいは見学の際、あなたに向けて行われた指導助産師や教員からのサポート。

〈実践したケア〉として「汗を拭き、いきまなくてもいい時には力を抜くように手を取った」「呼吸法とか声掛けを助産師と一緒に口に出して言ったりした」等が語られた。〈指導されたこと〉として「CTG

の読み方や分娩室での学生の立ち位置」、「汗の拭き方、手を握る、腰のさすり方や圧迫の掛け方、水分摂取を勧める」等があり、〈よかったこと〉として「産婦が酸素マスクを装着したことの理由の説明」を挙げていた。これらは【実践的な支援】である。一方で、「頑張っている人に『頑張って』というのはよくないと学んでいた」等の、〈声掛けにおける戸惑い〉も感じていた。あるいは、「言葉に責任を持たないといけないが判断基準が分からない」等が〈悩んだこと〉として語られていた。また、〈困ったこと〉として、「産婦さんと学生だけの時に『赤ちゃんは（大丈夫か）？』と聞かれたが何も言えなかった」、「私は体験していないのに、どう声掛けをしたらいいのか」が語られていた。

6）事前に学びたかったり、指導して（おいて）欲しかったりしたこと。

分娩見学中に【実践できたケア】として、「背中をさする、うちわであおぐなど、学生でもできる援助を自分で理解しておくべき」と、特別な知識や技術が無くても出来た援助があったことを語っていた。その一方で、「もっと声掛けとか勉強しておけばよかった」と【声掛けの難しさ】を挙げる学生が7名中5名いた。さらに、提供できた援助に対して「その場でアセスメントが出来るような」「咄嗟のときの判断ができるような事例を使っての準備」をして望めば、よりよくケアが出来ただろうと気が付き、【看護計画立案の必要性】を最認識していた。そこから、「分娩中のケアをロールプレイで授業中にやったらよかった」、「学生がすることをわかっとけばよかった」とし、〈学生ができるケアのイメージ作り〉をする一方で、「分娩中に（産婦からの）当たりが強くても陣痛によるものであること」を知っておくべきであったり、「吸い飲みの使い方を体験したことが無かった」ことへの反省を含めた【具体的な事前学習】にも気付いていた。

考察

1）学生の心に生じる自己内対話

この度の聴き取りにより分娩見学ができた学生たちは、苦しむ産婦を前にして「どうしたら良いのか」「この人の力に私はなれているのか」と、自問自答や葛藤を繰り返していたことが分かった。これは、圧倒されそうな分娩の現実を前にしながらも「看護学生として受け持ち産婦に対し、しっかりと看護を行ってゆきたい」という素直な思いを抱いた「私」と、「自分が行っている看護で果たしてよいのだろうか？寧ろ産婦にとって負担になっているのではないだろうか」という疑問や自己否定感情を抱えたもう一人の「私」が、同一人物の中で対話をしつつ葛藤している様子と考えられる。こういった感情は、実はグループインタビュー前に各自で記述したカードには、7人中2人しか書かれていなかった。しかし、他の学生の発言を聴く中で、結果的に6人もの学生が「私でよいのか」「自分に何が出来るのか」といった自問する発言を口々に語りだしたのである。こういった状態をHermans[3]らは、自己内対話と唱えた。心理学者の溝上[4]は、青年期の自己形成課題を念頭にして自己論を展開する中で、「この自己内対話によって生じた課題を乗り越えるには摺り合わせや調整が必要であり、そのプロセスがアイデンティティを形成する」としている。分娩見学中における対話的自己の摺り合わせ結果とは、不安を抱えながらもその場を逃げ出さずに産婦の傍を離れず、タイミングを見計らって必要な教育支援を教員や指導者に自ら求めることができることだと考える。だからこそ後から見学を振り返った際に、具体的な事前学習や看護計画立案の必要性を実感した声が聞かれたのではないだろうか。また溝上は、青年心理学を専門とする立場からこの対話的自己論を引用しているが、看護学生はまさに青年後期から成人前期にある者が多く、分娩見学という経験を通しても自己形成の途上の重要な場面を経験していたとも考えることが出来るだろう。これについてはJane Kroger[5]の、「青年後期はエリクソンが述べたアイ

デンティティ形成過程において心理的に大きく前進する時期」とする一節からも、この経験の意味深さが確認できる。よって、分娩見学中に学生達が抱く自問自答や葛藤をネガティブにとらえるのではなく、成長に繋がる必要なプロセスとし、ポジティブに見守りたい。

2）学生の語りから見出される教育支援

次に、学生達が果たして「私でよいのか」、「自分に何ができるのか」と、自己効力感が低下したまま産婦の傍に付き添っていたことが語りを聴くことによって明らかになった。しかしそのままの状態では、いくら貴重な分娩を見学できたとしても学生自身の学習効果が期待できないだけでなく、肝心の産婦への看護にも集中できない。この状況を脱する手段として安酸は Albert Bandura[6] をひき、自己効力に影響する情報源と方略として、①遂行行動の達成、②代理的経験、③言語的説得、④生理的・情動的状態の 4 つを挙げている[7]。今回の協力者の語りを想起して分類した場合、①と④は分娩終了時に味わえた【感動】や【充実感】、〈よかったこと〉等が当てはまる。しかし、②と③は充足していない中で学生たちは産婦の前に立っていたと考える。②の代理的経験とは「デモンストレーション等を通しての類似的な達成感」であるので、今後の演習課題としたい。しかし、③は「自分の行為、達成を自分でも、周囲からも言葉で賞賛され、確認されて、さらに達成感が高まっていくこと」とある。これに関してポジティブな学生の声は、ほとんど聞かれていない。寧ろ〈申し訳ない、これでいいのか〉、〈どうしたら良いのか〉、〈思っているが言えない〉等、終始迷いの中にあったことが改めて分かった。指導者や教員から【実践的な支援】はあったものの、【それでも残る戸惑い】は歴然として残っていたのである。刻々と変化する〈分娩の現実と衝撃〉の前に、このような感情を完全に払拭することは不可能ではあるが、少しでも学生の背中を支えることとは何であろうか。安酸は、「きちんと評価し、言葉や態度で支援され、信じられている、認められていると感じることができるように、教える側が意図的に関わること」を推奨している[8]。これについては重西らによる、分娩見学実習における学生の指導のあり方に関する先行研究成果が参考になる。具体的な支援とは、「学生の緊張を緩和し産婦への興味・関心を大切にする」、「産婦との関わりのきっかけを作る」、「産婦や家族がもつケアニードを共に模索する」、「学生の五感を駆使したケアを支援する」、「産婦に行ったケアとケアがもたらした効果を一緒に意味づけする」、「感情表出は表現を支援する」、「対象からのケアの評価をフィードバックする」[9]、である。産婦を前に緊迫し時間的余裕が乏しい中だからこそ、あえてその時に学生にきちんと言葉や行為で伝えることで学生は我に返れ、眼前の学びを自分の中に取り入れやすくなるだろう。特に初めて産婦と対面した時の印象が穏やかであれば、学生は過度の緊張に陥らなくて済むことが、この度の語りから判明した。となれば産婦に余裕のある内に挨拶に伺い、早い内に関係性を築けるような働き掛けを教員は心したい。こういった工夫の積み重ねは貴重な分娩場面の見学を許可してくださった母児やご家族に、学生からのよりよい看護の提供という形でお返しすることが出来ることに繋がるのである。

結論

産婦に対面した直後の学生は【嬉しさ】の反面、〈私でよいのか〉と【自問】し、【不安】を抱いていた。分娩が進む中〈分娩の現実〉を肌で味わい、産婦に対して行っている援助に対し〈申し訳ない、これで良いのか〉と、常に【自問と葛藤】を繰り返す〈自己の振り返り〉をしていた。見学中は臨床指導者等や教員からの【実践的な支援】によって〈実践したケア〉も多く、【感動】や児への【愛おしさ】を感じた一方、〈悩んだこと〉〈困ったこと〉をあげた声も聞かれた。終始、7 人中 6 人の学生が【分娩の現実】に触れることで〈どうしたら良いのか〉との思いを抱えながら、最終的には【充実感】を得ていた。今

回の研究対象者は7人と少ないが、その内の85％もの学生が分娩見学をする中で自問を繰り返していたことが分かったのは、グループインタビューという研究手法を用いたからこそ明らかになった。これは分娩見学中の学生達のこわばった表情や立ち尽くす背中を見るだけでは、決して伺い知ることの出来なかった本音だと考える。

しかし過度の緊張や長期化した不全感は、学生の学習効果が期待できないだけではなく、肝心の産婦への看護にも集中できない。この状況を脱する手段として、言語的説得の有用性を手掛かりとした関わりが、教員や指導者には求められると考える。さらに学生は、苦しむ産婦を前にして自問自答や葛藤を内包した、自己内対話を繰り返していたことも分かった。だからこそ、【具体的な事前学習】や【看護計画立案の必要性】を一層自覚するに至ったとも考えられる。この度の研究で明らかになった、表面からは見えない分娩見学中の学生の心理的状況や成果を、身近に存在する教員として心に留めたい。

利益相反状態に関して

本研究において、表記すべき利益相反状態はない。

謝辞

勉学の多忙な中、快く研究に協力してくださり、興味深い語りを聴かせて下さった学生の皆様に心より感謝申し上げます。

引用・参考文献

1）中島久美子 , 早川有子 . 母性看護学実習における学生のストレスと対処行動から捉えた実習指導の課題 . 群馬パース大学紀要 .2014,17,53-63.
2）Immy,H;Stephanie,W.”第7章“質的研究としてのフォーカス・グループ”. ナースのための質的研究入門―研究方法から論文作成まで . 野口美和子監訳 . 第2版 , 医学書院 ,2010,108-120.
3）Hermans,H.J.M & Kempen,H.J.G. 対話的自己論―デカルト / ジェームズ / ミードを超えて . 溝上慎一 , 水間玲子 , 森岡正芳訳 , 新曜社 ,2006. 282p.
4）溝上慎一 . 自己形成の心理学―他者の森をかけ抜けて自己になる . 第1版 , 世界思想社 ,2008,163.
5）Jane Kroger.”第4章青年後期のアイデンティティ”. アイデンティティの発達―青年期から成人期―. 榎本博明編訳 , 第1版 , 北大路書房 ,2005,86.
6）Albert Bandura. 激動社会の中の自己効力 . 本明寛、野口京子監訳 , 金子書房 .1997. 352p.
7）安酸史子 . “第2章経験型実習教育を支える理論”. 経験型実習教育―看護師をはぐくむ理論と実践―. 安酸史子編 , 第1版 , 医学書院 ,2015,43.
8）7）と同じ
9）重西桂子 , 岡崎愉加 . 分娩立ち会いにおける学生の体験と指導のあり方 . 岡山県立大学保健福祉学部紀要 .2006,13（1）. 47-56.
10）溝上慎一 .”6-2ハーマンスの対話的自己”. 自己の心理学を学ぶ人のために . 梶田叡一 , 溝上慎一編 , 第1版 , 世界思想社 ,2012,203-208.